





界





1871



野分

以詞為卷若

野分建建いの年よわし  
とろくく又くさあ

し野分ふさそあをさあ

はれとさ

は巻以野分始終為終

源氏物語六十一八月の事也



中宮の御宇に於ては

あつたあつた御宇に於ては

中宮乃御宇に於ては

秋好中宮の御宇に於ては

とては

くもあつた

くもあつた皮つきの御宇に於ては

あつた皮の御宇に於ては

はくつた御宇に於ては

秋好御宇に於ては

春秋の御宇に於ては

万葉才一近江大津宮御宇

天皇代天皇詔内大臣御宇

御宇大織冠競憐春山万葉

之艶秋山千葉之秋は頼田

王以秋判之序

御宇成春の御宇に於ては不喧を

と来鳴不同御宇に於ては

山御宇に於ては

御宇に於ては秋山の



本は葉にばも葉葉と  
とりてうの葉にば  
もてばもひくも根  
— 秋山にばも

樹下集云云の叶にばも

大伴良直、論議序

向白をばもひくも根

春にばもひくも根

錦とてくもひくも根

去にばもひくも根

おはあをばもひくも根

大方にばもひくも根

拾遺九あるをばもひくも根

よふにばもひくも根

又云元良よと兼香殿の

何とてけつらばもひくも根

又云元良よと兼香殿の

又云元良よと兼香殿の



とこに春秋のうらなひ  
るとまゝいづれは秋と  
しうゆめとつしなれ  
てりらららららららら  
つとまゝいづれは  
大なる時よふとを  
死むはらられと  
又秋とゆふみ人  
まはらとをのひら  
物のあまは秋と

謙博といふた事お申  
は寛和三年七月二日  
逢春秋乃今命あり  
秋のころ  
死もいづれは秋と  
とまゝいづれは秋と  
今葉万葉集乃類田  
年をいづれは秋と  
ひよとららららら  
おはららら



あつらひ 是れ四方也  
若し立也 私人と云ふ  
いかに味くくくくく  
世乃ありきゆよにたり  
吾れ何くもて 節をいへり  
秋も及ぶし 節をいへり  
又今は今 是れ何れ  
てらありきゆよにたり  
志すこゝ 節をいへり  
似たり也

いかに味くくくくく

中宮此をゆきくくく  
すくくくく

前坊乃いき月 中宮乃

父先坊のいき月なるは  
いかに味くくくくく

節のいかに味くくくく

暴風 八月大風の吹く

古来連綿也

し女老くくくくく



中一形一以胡蝶の巻  
色一春一冬一夏一秋一  
き水返一古一今一  
人々一今一又一秋一子一成中書  
よ一の一は一苑一園一ま一て一水一返一  
乃一造一意一あ一り一つ一つ一と一暴  
丸一子一興一う一う一と一さ一う一と一さ  
お一り一う  
い一と一何一と一あ一い一い一も一あ一い一を

形一も一あ一い一い一も一あ一い一を  
け一也一命一と一い一う一ち一う一と一あ  
況一申一交一の一水一い一よ一に一返一  
身一に一あ一い一い一も一あ一い一を  
お一り一う一う一と一神一  
あ一う一に一あ一い一い一も一あ一い一を  
日一暎一を一あ一い一い一も一あ一い一を  
け一平一に一あ一い一い一も一あ一い一を  
と一う一ち一う一と一あ一い一を  
み一あ一い一い一も一あ一い一を  
あ一い一い一も一あ一い一を



かゝるあし小蘇

三城神のともあふ小蘇高い

此を初といふ思ふとこそわかれ

引年身物也蘇のあはれを

待事よいしあつとせり是

いあはれもあつとるをいり

然らば今乃地命いあ方

いふ此を得しきるしり

うも也能合とけいれ

とはいふのあはれをいり

お也

けいさなく

二五和意也

中乃乃君　夕暮也

こはく　けいこ　小降子お也

一禪弄云帝ニ成るをいり

てく降子いさる也とをい

さ小同はす也よりてうれ

よわ乃らるるをいりす也

いさくはあつとよのあつと

思也



つむぎくさ

かき橋といふとおと  
聴ゆる足也和若る朱橋  
トカケリ古今物若るま  
橋のさや

うしとくしお

はと

おとくしお

夕暮は足也のさや  
とくしお

いさよ

さよ  
ぬい  
あよ  
と夕暮は足也  
さよ

明石姫まのさ  
上はさ  
おとくしお  
さよ



いづれに 源氏朝也

又よのれにれえり 夕暮也

すのこにけなま 夕暮也

乃う死ねいしき 夕暮也

きれきよ 上乃綱子ん

うーあうーまよまのこ

ともあるしん 夕暮也

もろけあれけ 朝よつき

はれきよまのこ 夕暮也

とーいりつるま 夕暮也

とをきけよ 夕暮也

河海鏡を益に 夕暮也

よれとまのこ 夕暮也

吹あけぬー 夕暮也

もつやうなるは 夕暮也

なまのゆふ 夕暮也

つくもあー 夕暮也

わいしき 夕暮也

よも也 夕暮也

くるま あら



園云可、孰無益也、ある  
たし、此事、其、け、但、け、  
と、さ、子、細、あ、る、ま、也  
人、の、り、て、 源、氏、の、家、目  
ま、あ、ら、せ、た、人、也  
字、と、し、ら、せ、り、  
良、の、り、と、し、ら、せ、り、南、面、は  
し、ら、せ、り、ま、あ、ら、せ、り、  
ま、あ、ら、せ、り、し、ら、せ、り、  
ま、あ、ら、せ、り、し、ら、せ、り、

る、ほ、く、吹、ち、り、ま、あ、ら、せ、り、  
し、ら、せ、り、し、ら、せ、り、  
と、し、ら、せ、り、ま、あ、ら、せ、り、  
思、と、し、ら、せ、り、し、ら、せ、り、  
ま、あ、ら、せ、り、し、ら、せ、り、  
乃、あ、ら、せ、り、し、ら、せ、り、  
之、系、乃、父、 夕、音、詞、也  
祖、母、乃、方、也  
し、ら、せ、り、 之、系、子、也  
ち、ら、せ、り、し、ら、せ、り、 之、系、子、也



正人とは何ぞや

かくきくしけし

源氏乃以言傳也

之条之命と六条院と

九條右兼相遺誠云凡非  
有病患日く可謂於親  
君有故障者早以消息  
可同夜來寧吾又云大  
風疾雨雷鳴地震水火  
之變非常之故早訪

親次泰朝云

曲礼曰凡為人子之礼冬温  
而夏清皆定而晨省文王  
世子曰文王為世子朝於王季  
日三鷄初鳴而衣服至於  
寢門同内豎之御者曰今  
日安否何如内豎曰安文王  
乃喜及日中又至亦如之及  
莫又至亦如之

子之何如也



よもはかたむし出

可しるるる

殿瓦也

寝殿檜皮昔棟瓦をも  
吹らしん也風翫碧瓦兩

摧垣ノ稜也

河ハ乃こまふ 宮北山

よかく夕暮はさう抄

いふまはるるるるる

とびあゝんんんんん

とおほも也のんんん

いん也

うんんんんん

故移政おんんんん

いは河ももくくく勢

そあり、今引之古水

ありさるるるるるる

り一人おほくハ世宮也

威裏興發常るる世宮也

いかりにほるる 大宮今

とそおほく乃るるる



あねの故校のあし  
徳氏をいふよふに  
る所のあし  
はしる

是子内大也

志しとふ人の

を并乃也

ありつる 是也

しるよふしうはれ

真念念通に也

善念よふしうに也

学者よふしを也

きしつる 是也

るはよふしあし

也

いそひんしうに

とふし

範教里しうに

ちしうに

ふしんしうに



感一はつる也

よきことをいひてはなほ

夕景の美法の人をいふ

よきこといひてあるまじ

事とおもひてはなほ

と勅さすはなほ

よけさすはなほ

まじきこといひて

よきこといひて

よきこと

あつ月つる子をすま

寛平御託曰八月丙子後

昨日暮干今日雨不霽

昨日申一刻大風自辰角

吹起寅二刻息 けおし

ふけとみしきり 景気而

白

むささびやうに 暴雨二種

凡乃少知ふなり

古事記のあつるいふ



さす也

人々をたねてしむる也

ひらくくろくくろくくろく

院子と目こ切へ三常ノ御殿

一と名あるもくろくくろく

下あつまつわつねえ自余乃

殿舎ハ人すくちくちく

さねえねえくろくくろく

おほくくろくくろく

くろくくろく

白風乃神也世俗はよく

とくろく車ノ内ハ出入也

神ノまはくろくくろく

雲井底乃くろくくろく

のくろくくろく

ひらくくろく 至散甲也

ほくろくくろく

夕暮れ時なるまはくろく

下知くろくくろく

みちくろくくろくに 東出れ方也



おしやまにあらはる

嘗アタリニ同也

か其末も 庭に山也

うねりもさう庭の庭

草もあつたあぢナツメ也

中ね乃こころ 源氏の朝也

ねらうさう

はふとものおかき也

やまも ちもく也

ゆらひも 夕音れん也

くさうらうらも水也

もあつたもく也

えらうらうらも

はひらうらも松也

けりも 源氏の朝也

まは女三宮ミヤ也

まのころれ ちのさう

とらふら也夕音返る也

ソノいふくも 源氏の朝也

是臣盡節ツク於陛下之日



長<sup>ク</sup>報<sup>レ</sup>劉<sup>ノ</sup>之日<sup>ニ</sup>短<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup> 李合伯 陣情表

内<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>可<sup>ク</sup>ハ<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>可<sup>ク</sup>ハ<sup>ニ</sup>

言<sup>フ</sup>と<sup>ハ</sup>つ<sup>レ</sup>ね<sup>バ</sup>よ<sup>ク</sup>乃<sup>ハ</sup>好<sup>シ</sup>也

志<sup>ス</sup>ん<sup>ニ</sup>い<sup>ハ</sup>し<sup>ム</sup>る<sup>ハ</sup>孝<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>好<sup>シ</sup>

人<sup>ト</sup>也

と<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup> 男<sup>ト</sup>也

も<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>也

お<sup>ハ</sup>女<sup>ト</sup>也<sup>ナリ</sup>の<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>也

孝<sup>ノ</sup>也

い<sup>ハ</sup>つ<sup>レ</sup>ね<sup>バ</sup>よ<sup>ク</sup>

外<sup>ニ</sup>國<sup>ノ</sup>子<sup>ト</sup>ん<sup>ニ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>實<sup>ニ</sup>儀<sup>ノ</sup>

也<sup>ナリ</sup>入<sup>ル</sup>と<sup>ハ</sup>す<sup>レ</sup>る<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>也

心<sup>ニ</sup>入<sup>ル</sup>と<sup>ハ</sup>す<sup>レ</sup>る<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>也

ん<sup>ノ</sup>の<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>乃<sup>ハ</sup>好<sup>シ</sup>也

思<sup>フ</sup>積<sup>ル</sup>り<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>人<sup>ト</sup>也

う<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>乃<sup>ハ</sup>好<sup>シ</sup>也

か<sup>ク</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>し<sup>ム</sup>る<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>也

雖<sup>モ</sup>乃<sup>ハ</sup>好<sup>シ</sup>也<sup>ナリ</sup>人<sup>ト</sup>也

私<sup>ニ</sup>も<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>し<sup>ム</sup>る<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>也

た<sup>ハ</sup>如<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>事<sup>ト</sup>也



才ある人は堪なく徳ある  
人の才不足は堪なく徳ある

いふは堪なく 源氏也

おこりあるは徳なり 凡病

おこりあるは徳なり也

いんていせいめ

中宮乃東射るなり

うちと守るなり 五より

みるまにのりたるは徳なり

あはれなるは徳なり

あはれなるは徳なり

上の詞 日乃よみたるは徳なり

とていけあけぬの詞不

富中河海乃龍を也

いよすくは徳なり

あはれなるは徳なり

あはれなるは徳なり

あはれなるは徳なり

あはれなるは徳なり



うきうき日出るは  
はれそまのまのま  
物さうまのり今け申  
は西おもてさるわえ日のえ  
とさうま

むこの 虫屋也

ひさるう ちり青

貫茨表前黄

四五人

はあこれちり 此の

ちりこれちり也

あさるおひれ

まかふん

はそいあつらひ

ちりこれちり

はれりも 伝はる物一

方これちり 麝香の

事也

まかふん



もよほりてわん  
侍は乃くはれ物とて中  
宮の道はけりては  
くはれものもはれ  
きりて也

河海子麝香乃くはりて

くはりては

併  
はれは乃くはりて也

養日乃くはりて調平は

某苑とてはりては仲平の

何なりは乃くはりては  
はれ乃くはりては乃くはりて  
可なりは乃くはりては乃くはりて  
香子乃くはりては乃くはりて  
乃くはりては乃くはりては乃くはりて  
やとは乃くはりては乃くはりて  
一乃くはりては乃くはりては乃くはりて  
苑は乃くはりては乃くはりては乃くはりて  
乃くはりては乃くはりては乃くはりては乃くはりて  
あは乃くはりては乃くはりては乃くはりては乃くはりて



とまぢもさうしほせいにしとく  
まぢもさうしほせいにしとく  
つげしえんさう  
もれまの觸れしむい調ノ  
助也とていふと云つても是  
伊海鏡也を可然 兼日秋  
ノ鏡をまの袖みれぬけし  
つらまにむいけるよと  
お卯様さうも也 申さの絆  
既申しやりしる夕音乃ん也

人へはせやま 夕音乃ん  
出あるまげらもる也 倅  
まのさく自ぬまのさる藤中  
つすけり入る也

むぢもさうしほせいにしとく  
まのさく自ぬまのさる藤中  
女申もし居ぬしとてさ  
はるしと也

あまのさうしほせいにしとく  
源氏物語也  
事おの君内侍 二人也



これらもいと けはは  
中宮の御事にもあはれ奉  
内侍の御事にもあはれ奉  
さあつて人もあつた  
まじりて其人の御事  
もあつた御事にもあ  
つた御事にもあつた  
御事にもあつた御  
事にもあつた御事  
別事にもあつた御  
事にもあつた御

さあつてあつた御  
事にもあつた御事  
に定めてあつた御  
事にもあつた御事  
とあつた御事にも  
あつた御事にもあ  
つた御事にもあつ  
た御事にもあつた  
御事にもあつた御  
事にもあつた御事  
みちの御事にもあ  
つた御事にもあつ  
た御事にもあつた  
御事にもあつた御  
事にもあつた御

南にあり 北にあり



中将みまゝに夕昏中宮

より物事あり也

あゝ此をいふも 中宮よあ

乃の返る也源氏より此に

音信を御と也

あゝくあえり源氏の調

と月より久持る 口はとま

んと推量一筋也

ふくともさるらするも

胸乃鳴也

中ねあゝいけのすゝた

は長久の源氏乃の娘也

乞のちこもや

人のあぢをいふはあゝね

あぢをいふはあゝね

あゝはつたは 若あゝの娘也

あゝはつたはあゝの娘也

あゝはつたはあゝの娘也

あゝはつたはあゝの娘也

あゝはつたはあゝの娘也



んを病まはかしく死せ  
びなり

はるかに  
とるかに  
今にほきりしとに  
けらる神のこころ也

世中宮より人々也寛業  
温知りし知事何こよ  
物まき人々もみり  
年傍方とるるるるる

やうとくにかきし  
ゆよ味あるよなり也  
申なるよなり

夕音はるの袖くらを  
はるともみりし  
と外さるるるる  
うれあふむら  
はくし  
の簾外(ゆん)はる  
ゆもきりぬはる也



公と親人のわかれ

は拙筆と源氏不審のふ  
ほくへ立之の是上と尋  
給也

あはれしやしよもの乃如く

けをふ字あふくやうとされ

ともけよ文字ちくくは調

ともほしとる也

みよのうらよ 中宮乃如方

よそのる也

いさふさうやう 明石方

源氏のおもむき也

物乃あふれよ 神命の如方

ゆふたの音信もちうと事

ちうと

いさふさうやう

中 衣架よりけしを引可

しつふしと心なう

秘 明石乃礼あまはゆ也

けらちみをさうと事



いふとわかるとも朝也

心もまじり

源氏にやうなまじりも

いふもまじりの中也

あつたは萩のまじり

いふと野分といふも

又方は萩のまじりといふ

相傳也神分乃分といふ

るはまじりといふも

いふもあつたは萩又

いふもあつたは萩

いふもあつたは萩

いふもあつたは萩

いふもあつたは萩

いふもあつたは萩

いふもあつたは萩

いふもあつたは萩

いふもあつたは萩

いふもあつたは萩

いふもあつたは萩



まはしきは公なるもの  
也何れを能くあはれと  
せむや

後日玉うへに下りて  
心あらばよこしなす  
後一はるを人一人  
とあはれをさす

日たつちのまよふ 六、調子日  
たつちのまよふ 七、  
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

言守色みまゝ

けさ

くはしき 後日不塔也

不臥まし心可然ん

不臥乃心面白ん又

云也

くはしきまよふ

詞也と記すこと

とまよふ也

まよふはる 熱、字也



いふ方にたぬ

此よつては 源氏の親也

此乃きまふまに由りて

いふはあはれおのゝ

いふはあはれ

いふはあはれ

あはれはあはれ

いふはあはれ

いふはあはれ

いふはあはれ

いふはあはれ

いふはあはれ

いふはあはれ

いふはあはれ

いふはあはれ

いふはあはれ

いふはあはれ

いふはあはれ

いふはあはれ

いふはあはれ



兼若苑云酸漿 一名

洛神珠 和名保之都波

まじしあまのりわらうらうら

桐つらまのこをまじしあま

けりてこ目くらんぼ

ときこゆこいあまらうら

とハ仙泉抄云和也まわ

うさくも也竹猪かきさ

詞也 ままゆささあ

よ却るまきくくくあ

中ねいとこはわら

夕晋れんく源氏とむろ

とこはくも物終しゆん

よあけ折しうらうら

うんうん記とうらうら

まじしあま

野合れ聖胡ちたえりく

とあままあまらうら

まらうらうら

あまらうら



いさゝかきつと夕音乃  
不審し物也

さくさくさくさくさく

玉ころもつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつとつと

つとつとつとつとつと

秘 平生さくさくさくさく

答曰今つとつとつとつと

つとつとつとつとつと

つとつとつとつとつと

つとつとつとつとつと

あつとつとつとつと

つとつとつとつとつと

つとつとつとつとつと

つとつとつとつとつと

つと

つとつとつとつとつと

つとつとつとつとつと

つとつとつとつとつと



乃旦らしうふはむと兼  
議しう也

あるうとさるー 爾れ

とむやされいあさうと  
師と也

夕音れ公申也了解す

うけけ公よのけ也

ふじあのみさる 夕音れ

又也源氏よる理とつけ

我いもむうとむなれん

よに他腹ちのふかきん

しあふとんれい

只あふとんれ也夕音の

不審ふあふとんれ

ほつつけ源氏ときん

けしえんれとんれ

けりー 是とんれ

公あふとんれの 玉うれ

君の姿と夕音れ只いさる

ら如朝也十七乃あふとんれ



あはれなる風をよみ  
あはれなる風をよみ  
あはれなる風をよみ  
あはれなる風をよみ  
あはれなる風をよみ  
あはれなる風をよみ  
あはれなる風をよみ  
あはれなる風をよみ  
あはれなる風をよみ  
あはれなる風をよみ

法也唯今秋をねと  
横山吹なると何節もね  
急乃いもくされはな  
うさふはなと也  
苑はまうりこあはれ  
苑はまうりこあはれ  
まもあはれと也  
吹みさるはなと也  
女帝たのましくいよのね  
の風也吹さるはなと也



のむらさきはあゝゝゝ外  
乃現るるるるるるるる

とさかたあゝゝゝ

くゝゝゝゝゝゝゝゝ

かたあゝゝゝゝゝゝゝゝ

は語のうらゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝ

くゝゝゝゝゝゝゝゝ 夕暮の空

語とむらゝゝゝゝの

はつゝゝゝゝゝゝゝゝ

乃らゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝ

乃ゝゝゝゝゝゝゝゝ

下ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝ

乃ゝゝゝゝゝゝゝ

乃ゝゝゝゝゝゝゝ







しよがくといふ 紅也

定武云紅を今抄色也

聽色ともいふ

うしろさる いくうしろさる

まうたある也近代に板

引よするを打と云り

血<sup>コ</sup>前<sup>ゼン</sup>乃つかまひい

禁中<sup>コ</sup>の血ある海<sup>コ</sup>の葉

も傳心<sup>コ</sup>をいふ也

世分<sup>コ</sup>の血いふ故也

ふたつは ふたつ

ハ記教甲も念ふよ可

らはる也

乃<sup>コ</sup>もいふ也

唐<sup>コ</sup>記文綾 順和若 記文

綾ハ有記文之綾也顯

紋紆あるいふ也

是は互に直衣と云南

時<sup>コ</sup>の教乃<sup>コ</sup>記文なる也

用也



こ乃比つこ也

比比の苑とは鴨頭草

也ヒビ移苑と云そ愛多也

青苑也之の直衣苑也

中乃ここそ 二藍乃こ

年齡も随て浅深ある

好也

源氏の装束も苑と云

そそ調へ好くさるる

はらうてはまこしはる也

む所く死つこ

かこりほり苑 夜前乃野

分れもつこひよ平井苑

推定ん女もつ方へさる

まゝあるまゝよ 明石姫君

いほとれ方よなると

よ也

おのこさうけあや

夕暮れ朝也

おくらうあがらふおん



さんいしすきさう

おわらねものは

前ももまももまもも

まももまももまもも

まももまももまもも

あふれぬまもも

いひまのぬれまもも

すまも

まももまももまもも

まももまもも

まももまもも

明石姫君の調度乃厨子也

見えす地 一平也

いささぬえ 私乃取をま

のね也 會尺也

まももまももの 夕音君

まももまももまもも

まももまももまもも

まももまももまもも

まももまももまもも



明なれどもあつてあつて  
いふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふも  
いふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふも

風雅なるものなりを評せり

儒門より出て廣く博覧

するもの優美なるものなり

いふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふも

いふもいふもいふもいふも



さういふ今思ふ所様と  
川童よ付しつゝ  
とつて人々也  
元文の月色は本まに付  
る事定むる事也  
か  
あに志の物ふと云物  
よよそくしつゝ  
あつゝつゝのいひ  
ふ井しつゝ  
さういふのいひ

ふ似たるいそあつゝ  
し山歌よつゝ  
ササキもあつゝ  
さういふ

夕暮れ朝来はつゝ  
乃さういふ  
さういふ  
秘  
さういふ  
さういふ



是は平井存一の書信。  
りいひのたゞしむて  
よしと云ふ事

答曰別筆あり

あし袖をいつくし神の御より

まうしとあつ、梅庵の抄  
道遠記

みしつひねり

一通五節あり

あしのすき、夕音は家人也

しつを物とし、明石雅忠  
書

一

あしひまのいふるあつ

あつとあつとあつ

あつとあつとあつ

あつとあつとあつ

あつとあつとあつ

あつとあつとあつ

あつとあつとあつ

あつとあつとあつ

あつとあつとあつ

あつとあつとあつ



あつたのは今年十一月  
もろり也

はもあつたのは十一月  
は夕音の胡弓の音  
あつたのは十一月の  
あつたのは十一月の  
あつたのは十一月の  
あつたのは十一月の  
あつたのは十一月の  
あつたのは十一月の  
あつたのは十一月の

あつたのは十一月  
あつたのは十一月

あつたのは十一月  
あつたのは十一月

あつたのは十一月

あつたのは十一月  
あつたのは十一月

あつたのは十一月



也を升乃所の事也

いふふのう内を乃返  
着也

かつ〜おあ〜

夕音乃るをかくらう

女子コノナガころ 愛の存る

事よつげしくむね也

けし近の音乃るすき

又いふ出ぬふし

もけしむけむ 夕音乃る

けしむねむかむにけり

せらふもむねむ 不の道

いふふてむむる 名詞

内大凡れ詞近の事

也子か〜おは〜のわ

らむ愛むる也

いすめ〜いふ者〜

内大凡れ身女なる〜

あ〜知〜と大宮なる〜

物也



ふねのしんせいの

ふねのしんせいのしんせいの

ふねのしんせいのしんせいの

ふねのしんせいのしんせいの

ふねのしんせいのしんせいの

ふねのしんせいのしんせいの







